

2020年度（令和2年度）おきぎんふるさと振興基金事業報告書

実践テーマ

「異年齢集団で行う学校教育外教育の可能性を探る」

～貧困問題、発達障がいや不登校、ひきこもりの児童生徒達の課題解決を学校と連携して～

2021年6月15日

山城塾（無料塾） 山城 勝秀

I テーマ設定の理由

最近、貧困や非行、発達障がい等の課題を抱えた児童生徒達が、それらが原因で不登校やひきこもりになり学校に行けなくなっている事実がある。その数は那覇市内のある中学校では30余名もいるという。文科省調査では全国で約10万人（不登校は年間30日以上欠席者のことである）いると報告されている。ところが、実はそれ以外に隠れ不登校が増えているという実態がある。隠れ不登校というのは30日未満の欠席者のことで、全国推計33万人以上（2019年日本財団の調査）といわれている。本塾に通う生徒達の中にも隠れ不登校の生徒達がいる。その中学校を見るとやはり隠れ不登校を含む不登校の生徒達の増加という問題がある。不登校及び隠れ不登校の原因に非行や発達障がいがあり、課題が多くみられる。私も30年余教育現場にいたので、不登校の問題は以前から気になることであつたが、なかなかその解決はできなかった。

塾において課題を抱えている児童生徒達の支援をするうちに、何かこの子ども達にいい教育方法がないか模索しているとある新しい教育方法が目にとまった。それが「イェナプラン教育（※1参照）」である。オランダでは多くの学校が取り入れている教育方法である。この教育方法は異年齢集団で学習することで不登校が減少したということが報告されている。これは日本国内の公立の学校教育では実施されてないと思つたが、唯一広島県福山市立常石小学校が文科省から認可を受け2020年度から低学年でスタートしていることが分かつた。私はこれを学校外の教育で試してみたいと思ひ、実際に常石小学校に視察にも行ってみた。この方法は、自分の存在がみんなに認められ、学習が楽しくなるいい方法であると感じた。そして、学校外の教育の可能性として塾で試すこともよいのではないかと考え「おきぎんふるさと振興基金」を活用してこの実践テーマを設定して取り組むことにした。

Ⅱ 取り組み

1 会話を通して、個性を見つけることにより学習意欲に繋げることを心がけた。

2 中学1～3年生の異年齢集団での学習を実践

(1) 漢字ドリルを小学校1年生から始める。同じ問題を解く。

(2) 数学は中学1年生～同じ問題を解く。(習熟に応じて掛け算九九から)

3 教材、教具の工夫

(1) パソコンの6台導入・・・プログラミングの指導

(2) タブレット12台の導入、インターネットが使える環境を整え、教育用動画の視聴 (nhk for school 等)

(3) 漫画歴史本、話す地球儀、コグトレ本等

(4) ミニブロック、将棋、オセロ、カルタ、トランプ、卓球、バトミントン等

4 小学校の部の開設

(1) 小学校1年生～6年生までを1クラスにして、学習に取り組ませる。

(2) 共同作業 (段ボール、折り紙等で作品づくり)

(3) 学び合う、教え合う (絵本、ゲームを利用)

(4) 本人の得意なものを見つける。

5 学校との連携

(1) 特別支援教室の先生方と情報の共有

(2) 指導の共有 (得意な教科、苦手な教科、体の衛生・健康について)

6 イエナプラン教育視察

(1) 先進校視察

① 広島県福山市常石小学校 (10月29日)



常石小学校 (公立)



黒板がない教室



グループで学習

【感想】

まず驚いたのは、教室に黒板がないこと。さらに子ども達の席の向きがバラバラで、グループ単位で座っている。先生が2名、それぞれのグループを回ってお手伝いをしているという感じである。教師はファシリテーターである。教室がリビングルームのようにリラックスできる。子ども達がどんなことをやりたいか考える。1クラス小学生1年生～3年生まで縦割りの異年齢の学級編成。人数は約15名程度。一人一人が、かけがえのない存在として大切にされている雰囲気を感じられた。校長や、研究主任の先生がオランダで数カ月間研修を積まれており、確かな実践力がある印象を受けた。説明を受けていた保護者にも強い期待感が感じられた。

※1) イエナプラン教育

ドイツにあるイエナ大学の教育学教授だったペーター・ペーターゼンが創始した学校教育。オランダで普及している。異年齢の集団でクラスを編成し、子ども達一人一人を尊重しながら自立共生を育てることを重視している。教室がリビングルームと呼ばれている。健常者と障がい者が共に学ぶ。教師はファシリテーターである。理科や社会科の代わりにワールドオリエンテーション(総合学習)を行う。〈精神〉・・・20の原則がある。1～5目指す人間像、6～10理想の社会、11～20その実現に向けた学校像がある。

4つの基本活動に基づいた時間割があり、1 対話、(サークル対話)、2 遊び、3-1 仕事(ブロックアワー)、3-2 仕事(ワールドオリエンテーション)、4 催し(行事だけでなく、誕生日のお祝いもする)を基に教育活動を行う。

7 [山城塾の学び]

【学習の様子】



プログラミングの学習



将棋も勉強のうち



学習をサポート

【学びのスタイルの変化】



お互いに教え合う



ヒントを与える学習



タブレットで学習する

【生活支援】

○簡単な料理の指導

○食事支援

①サンドイッチの作り方

②軽食の提供

③コロナ禍で持ち帰り



【行事】

○七夕・・・普段家庭でやらないという七夕の行事



高校合格しますように



そうめんを頂く



喜納先生親子で料理

○生徒の誕生月に誕生日会を実施



ゲームで楽しく



誕生祝い(中学生)



小学校の部

○クリスマスパーティ



○高校合格祝い 2019 年度



○高校合格祝い 2020 年度



8 小学校の部の開設 (2020年10月)



場所： むつみ会館



異学年(小1~4年生)で学習



休憩時間にバドミントン



中学生のお兄ちゃんが教える



みんなで段ボールのお家を作ろう



小さな家できた～

9 インターネット環境の整備（むつみ会館）



Z o o m配信中

○タブレットの使い方、Z o o mでミーティングの仕方の学習



パソコンのカメラの前で自分の顔を映して遊ぶ子
（遊び感覚でパソコンやタブレットに慣れさせる）



パソコンの基本操作の練習

10 学校・その他の機関との連携

- (1) 小・中学校の先生方（学年主任、特別支援教室の担当職員等）へ塾の様子を不定期ではあるが提供。放課後の過ごし方等助言を頂く
- (2) 寄り添い支援員Kさん、SSWのAさんと情報交換ができ、校区内外で課題を抱えて困っている児童生徒の情報交換ができた。その後受け入れた児童生徒もいる。

Ⅲ 今年の高校合格者（2020年度）

1. Aさん（男）・・・県立真和志高校
2. Bさん（男）・・・県立真和志高校
3. Cさん（男）・・・県立真和志高校
4. Dさん（男）・・・那覇工業定時（電気科）
5. Eさん（女）・・・飛鳥未来きずな高等学校
6. Fさん（女）・・・八洲学園大学国際高等学校
7. Gさん（女）・・・八洲学園大学国際高等学校

IV 山城塾に協力していただいた個人や団体（2020年度）

1. 社会福祉法人「そてつの会」 教室の無料提供、パンの提供
2. 社会福祉法人「那覇市社会福祉協議会」子どもの居場所支援「糸」 塾の支援
3. 那覇市寄り添い支援員（SSW）2名 児童生徒の相談、紹介
4. 県小中アシストYさん 児童生徒の相談、紹介
5. 古蔵自治会 檉山弘子さん 軽食の提供
6. 野原秀次さん 沖縄県立盲学校職員・寄付
7. 沖縄製粉 沖縄そばの提供
8. 吉野家 牛丼の提供
9. 言事堂 （言事堂さんを通して個人の方より新しい本の寄贈）
10. 大城スーパー 生徒の支援、声掛け
11. 野田京子 民生委員・児童委員（那覇第4民児協）
12. 沖縄銀行 おきぎんふるさと振興基金（助成金）

V 講師陣・運営スタッフ

1. 山城勝秀（塾長、元教員）
2. 仲本政晴（元中学校教頭）
3. 喜納美由紀（珊瑚舎スコーレ講師兼任）
4. 金城辰也（元銀行員、自営業、民生委員・児童委員）
5. 池尻恒子（認定心理士、プログラミング指導）
6. 川満創琉（つくる）（ボランティア）沖国大
7. 金城遥香（学生コンソーシアムから派遣）沖縄看護大
8. 宇根梨納子（学生コンソーシアムから派遣）沖国大
9. 仲村渠忠一（むつみ会館責任者・むつみ会会長、おにぎりの提供）
10. 下地多美子（看護師、軽食の提供）

VI 成果と課題

【成果】

1. 公益性として地域の課題のある児童生徒の居場所ができ、学習の支援につながった。
2. 学習を嫌がらなくなった児童生徒が増えた。
3. 漢字の読みは、毎回繰り返しドリルをした結果徐々に読める漢字が増えた。
4. 塾の終了の挨拶を、その日塾で頑張った子がすることになっているが、指名された子は恥ずかしがらずに言えるようになった。
5. 塾の終了後は、清掃をみんなですることが日課である。以前はしないで帰る子もいたが、掃除を全員でするようになった。
6. 卒業した子が現在高校2年生になっても、毎回塾に通っている。進んで準備を手伝ったり、中学生に勉強を教えたりするようになった。
7. 中学生が高校生と時々、卓球をすることもありうまくコミュニケーションがとれるようになった。
8. パソコンに対する抵抗が少なくなった。
9. 小学生でもタブレットの動画を自分で検索できるようになった。
10. お互い協力して学習するようになった。

【課題】

1. 指導する側の勉強不足を痛感している。指導方法が身につけていないと感じる。
2. 嫌いな教科はなかなか進まない。
3. 不登校の児童生徒は、アウトリーチをしないと塾に来ない場合がある。
4. 非行の生徒と発達障がいの生徒は、塾に慣れるまで時間がかかる。

Ⅶ 今後の発展的な活動として

1. 近くの子ども食堂「KOBANNCHI（コバンチ）」さんと共同で、事業を展開する予定。
2. 他の子どもの居場所と連携して、持続可能な教育の場として展開していく。
3. このような取り組みをする団体が増えるような活動をして、後継者づくりにも力を入れたい。

○ 謝辞

私たちのような小さな任意団体が「2020 年度おきぎんふるさと振興基金」の支援を受けることができ心より感謝いたします。この基金を活用し、2020 年度は「小学生の部」を開設するとともにインターネット等の環境を整備することができました。コロナ禍の中、活動が制限されることもありましたが、子ども達の課題解決、幸せのために何とか工夫して取り組むことができました。関係者一同感謝申し上げます。